

## 役に立たない科研費

大垣俊一

国や民間の科学研究補助金、いわゆるファンドについては、いろいろな評価がある。しかしそれは、ファンドの提供者側が、採択された研究者の「感謝の言葉」を掲載する、自画自賛的なものであったり、学会等で議論される場合にも、どのような議論が行われたのか外から見えにくい。一方不採択になった研究者の立場から、あるいは私のように個人の資格で研究している者からの意見はあまり見たことがない。こうしたことは感情が絡みやすく、当事者としては発言しにくいし、また、今後のことを考えて補助金の運営主体に遠慮し、批判じみたことは控えるといった姿勢が見え隠れする。

私はこれまで研究補助金については、グループとして民間のものを3件、個人として旧文部省ないし学術振興会（以下、学振）のものを3件応募したことがある。このうち前者で2件採択され、後者ではすべて不採択であった。私は組織に属さない個人研究者として、もろもろのしがらみから自由なので、あまり周囲に遠慮することなく意見を述べることができる。また、機関研究者とは違った視点で物事を見ることができるかもしれない。そこで、ファンド応募の経験数としては決して多い方ではないが、これまでのこの問題についての印象を記し、一般の参考に供することとしたい。なお、内容は公費つまり旧文部省ないし学振所管のものを中心とし、民間ファンドについては、それとの関連で適宜言及する。

## 個人的経験

私が始めて研究補助金に応募したのは、大学院の博士課程、特別研究員（PDF）申請のときである。当時の記録によれば秋に募集があり、約1ヶ月後が提出期限だった。書類は学振から大学本部、本部から所属教室、教室から隔地の臨海実験所へと転送され、本部や教室で、手続きのためしばらくの間留め置かれる。これを往復で行うため、計算すると逆ザヤを生じて、申請書を書く時間がないことがわかった。あまりに理不尽だということで、大学に掛け合い、ようやく2日ほどの時間を得たが、この間に8000字の研究内容説明文や、関連書類を書かねばならない。これではゆっくりマニュアルを読んだり、書き方についての情報を集める余裕もない。共に申請した同僚の院生は、字を書きすぎて腱鞘炎になりそうだと悲鳴を上げていた。やっとの思いでぎりぎりに提出し、しばらくして1次選考通過のはがきが来た。2次の面接に来るように、ただし旅費は支給しない、と但し書きがある。そこで、和歌山から東京まで、時間をかけて自腹で行ったが、当日の面接では、研究内容についての話はほとんどなかった。「申請の仕方に不備がある。」とだけ言われ、後日、不採択のはがきが送られてきた。それならなぜ書類審査でハネなかったのかと疑問に思った。

次は、私が石垣島にいたとき、環境変化の進む八重山の汽水域の状態を記録しよう

と、各離島の汽水域の貝類相を調査するという題目で申請した。非機関研究者でも申請できる、奨励研究 B という 30 万円までの補助金だったが、不採用のハガキが 1 枚来ただけで、理由も示されなかった。そこで旅費を必要としない石垣島の名蔵干潟でのみ調査を行った。これは幸い再調査してくれる人があって、そのデータとあわせ、結果は英文で学会誌に掲載された。世界でも初めてとあってよい、マングローブベントスの長期変化の定量的な研究例だが、もし申請が通っていたら、ほかのいくつかの八重山の汽水域でも同様の調査を行っていただろう。

3 回目はつい最近 (2009 年)、25 年間続けた和歌山県、白浜番所崎の貝類相のデータをまとめるために、再び学振の奨励研究の補助金を申請した。同種の調査が少ないことや、近年の温暖化論議との関連など、研究の意義を強調したが、三たび不採択となる。ただし、今回は理由めいたものが書かれており、2 名の内 1 名の審査員から、「計画と経費の整合性を欠く」というコメントがついたという。3 千件余の申請のうち、約 1/5 が採択され、私の順位は不採択のうち上位 20% ということだった。面接に呼び出されたわけでもなく、またある程度理由が示されている点、対応は以前よりも改善されていると感じた。

## 問題点

### 1. 手続きの煩雑

研究費助成の手続きは煩雑である。先の 2009 年の例でいうと、学振のホームページのあちこちから 17 ページの申請関連書類をダウンロードし、熟読した上、5 ページの申請書を 3 部作って提出する。私は次まで行かなかったが、採択されればさらに 10 種近い書類を書いて提出し、新規に口座を開いて振込みを待つ。期間が終了したら、もちろん報告書等の書類を提出することになる。これらは大学の事務などに作業を移管できず、個人ですべてやらねばならない者には、相当な負担である。資料や提出書類が多いほど、書類上の不備で門前払いされないように、大変な気を遣う。公金を扱う以上、これくらいのことでは当然だという声が聞こえてきそうだが、公金うんぬんを盾にすれば、際限もなく手続きを複雑化させることができる。私の経験した民間のファンドではこれほどの手間はなかったし、奨励研究補助金の手続きそのものも、前回は今回よりはるかに簡単であった。公金であろうと私金であろうと、よけいな手続きはないほうが良い。今の手続きが本当に適切なものかどうか、検討する余地があるだろう。

### 2. 応募資格に見る固定観念

ファンドの申請資格を見ると、公的、私的を含めて、応募資格に大学や研究所等の機関研究者であることを義務付けるものが圧倒的に多い。学振の場合、私の立場で申請できるのは、今回の奨励研究に限られる。しかしその公募の目的として、「大学等で行われたいような研究」という但し書きがある。私は同分野同年代の、大学教授や准教授クラスの平均程度の仕事はしてきたつもりだが、そうすると私のような立場のものは、これに当てはまらないことになる。とって機関研究者でもないのも、もち

ろんそちらに応募することもできない。学振には、大学では最先端の研究、それ以外の高校教員等は「教育、社会的活動」を担えばよいという固定観念があるのかもしれないが、だとすれば考え方が狭い。

研究は、機関研究者のみが行っているのではない。学振の認める「公的研究機関」については細かなリストがあるが、これに含まれない組織にも研究者はいるし、ポストがないために大学に残らなかったが、研究の意欲を持ち続けている人々もいる。私自身の経験からいうと、公的組織を離れたとき、一番困るのは文献と研究費である。しかし文献については、インターネット上でオープンアクセスのものを利用したり、海外からもクレジットカードで購入することができるようになって、状況はかなり改善されてきた。加えて研究費についても在野の研究者に門戸を広げて提供すれば、潜在的な研究者資源を活用し、日本の学問のすそ野を広げることができるだろう。人文、社会分野のみならず、理系においても、地質学やマクロ系の生物学にはこのことがあてはまる。安定したポストや施設を提供されることによって進む研究もあるだろうが、損得抜きで好きだから続けているという研究の中からも、先端的な成果が生まれる可能性がある。

### 3. 「上から目線」の選考姿勢

公募要領の「個人情報取り扱い」という項目では、応募者の個人情報については、これこれの目的に使用することがある、と書いてあるのみで、「それ以外の目的には使用しない。」という一文がない。これらはインターネット等で業者が個人情報を取得する場合などには、必ず表明するものである。この書き方では極端な場合、何に使われても文句が言えないのかという不安を起こさせる。よけいな義務を背負わずに済ませたいのかもしれないが、その背後に、応募者は立場が弱いから文句は言えまい、というおごりはないか。個人情報の扱いは人権にかかわることである。これでは選考者と申請者の立場が対等とはいえない。また応募者は大変な労力をかけて申請書を書き、提出するが、それに対し受け取る側からの応答はない。「送付の記録を残しておくように」という指示があるのみである。受け取ったことの確認と、応募に対する謝辞、今後の簡単な予定などを通知するのは、社会常識からして当然のことである。旅費もなしに遠隔地から呼びつけ、手続き論で排除するという、かつて私が PDF で経験したやり方は、学振の「上から目線の選考姿勢」を象徴している。民間のファンドでも選考会や授与式があり、こちらから出向いたが、担当者の態度は丁重であった。応募者どうしの交流を図るパーティーなども設けられ、配慮に対して感謝の念を抱くとともに、期待に答えてできるだけよい成果をあげようという気持ちにもなった。

応募者はもちろん、「補助金を使わせていただく」立場にあるが、同時に学振は国民に対し「資金を管理させていただき」、研究者に対しては「補助金を使っただけ」立場にある。選考する側とされる側、どちらが優位にあるわけでもない。企業は自らの経済活動で得た利益の一部を、学術のために提供するが、学振が扱うのは国民の税金である。そうであれば、後者こそ一層謙虚であるべきを、実際にはさかさまになっている。これらは些細なことようだが、組織の基本的な性格がこういうところに現れる。また、逆にこのようなことの積み重ねが、組織の全体的な雰囲気や方向性

を形造るだろう。

#### 4. 選考過程の不透明

私が経験した不採択の3回とも、なぜ不採択になったのか、理由がわからない。3回目については、「テーマと経費の不整合、減額可能」という意見があったと記されていたが、それが決定的な理由だったかどうかは不明である。申請書には推薦者ないし指導者名を書く欄があり、必須ではなかったのですが私は書かなかったが、これがどう影響したのかもわからない。「3年続けて出すと当る」と言っている人もいる。これらについて問い合わせようにも、「個々のケースについては答えられない」と但し書きされている。たとえば学術誌に論文を投稿して **reject** になる場合、**reviewer** は通常無記名だが、理由については明記される。それによって、その雑誌の方針や論文の不備がわかり、次の投稿や今後の研究計画に対して有益な情報になる。補助金の不採択の理由がわからないと、たとえばそれが書類の書き方などの手続き的なものだったとしても修正できない。その結果、同じミスをして何度も不採択をくり返す可能性もある。申請者はばかにならない時間と労力をかけて申請をしている。それが不採択というのであれば、詳しい理由を示すのは当然であろう。

不採択の理由がわからないことは、選考の公正さに対する疑念を生じさせる。科学ジャーナリストの小出五郎は、「研究助成金の採択は、交付団体に対して力のある‘キーパーソン’にどれほど近いかで決まる傾向がある」と述べている（2009年12月3日、NHK「視点・論点」）。私が **PDF** を申請したときに面接者の一人だったある大学教授は、学会などで弟子に会うと、「お前は金はいらんだろう」というのがあいさつ代わりだったと聞いている。あるいは、文科省に人脈のある研究者は申請が通りやすい、ということもささやかれる。

私も50の坂を越えるようになるとそれなりに経験を積んで、どういう分野がどのようなメカニズムで動いているかということが、多少はわかるようになってきた。私が見てきた範囲でいうと、大学入試、雑誌の論文採否、学会における奨励賞などの評価はほぼ公正に行われているが、ひとたび金やポストが絡むと、コネ、ワイロ、有力選考者の個人的思惑など、ドロドロとしたものがまとわりつき、客観的判断とはかけ離れたところで物事が決められてゆく。先般の大分県の教員採用汚職などは氷山の一角にすぎない。これはもはや、日本社会の通弊というべきものである。研究補助金の問題も、金がからむ以上おそらくこうした面を免れまいと想像するのは、あながち理由のないことともいえない。学振の補助金についても、もし「有力者の口利き」によって粗悪な申請を上位にもぐりこませ、優良な研究が下位に押し出されているなら、「個々のケースについて答えられない」のは当然となる。これらの疑念ははすべて、選考過程が不透明であることに起因している。数多くの申請を異なる審査者が扱って、上位何%というような評価を下している以上、何らかの客観的評価基準があるはずである。それを公開すべきだろう。

#### 5. 使い勝手の悪さ

2009年の申請において、私は審査者から示されたとされる意見（テーマと予算項

目の不整合) を読んで、意外な感じはあまりなく、やはりそうかという程度の印象であった。この補助金の使用期間は、原則1年と決められている。生態学の研究で、調査をし、データ処理してゼミで話し、学会発表して論文を書き、校閲を依頼して修正、有料ならその料金の支払い。その後学術誌に投稿し、再び修正、**accept** され、掲載を待って別刷り代と超過ページ代を払う、というところまでを、1年以内に完結するなど不可能である。急いでも3年、余裕を見て5年というところだろう。つまりこの種の補助金は、一つのテーマに対して申請すれば、必ず一部分しかカバーできない。したがって全体としては金額が大きくても単年度ではそれほどでもないという場合、申請のしかたが難しいのである。私の場合は25年の調査の最後のまとめに必要な経費を申請したが、それ自体はそれほどの額ではないため、この研究を取り巻く一般的な研究活動のための費用を含めていた。科学哲学関係の原書とか、画像やファイル処理のパソコンソフトといったものである。それを「テーマとの整合性がない」と言われるのであれば、申請の意味はかなりうすれる。また、5万円以上の備品は「1年後に公的研究機関に寄付すること」と義務づけられている。パソコンや顕微鏡のようなものがこれに当たるが、顕微鏡については思い出すことがある。八重山にいたとき、マングローブ性の巻貝の調査をやっていた。この貝は卵胎生と報告されており、解剖してみると確かにメスの外套腔に粒状のものが詰まっている。ルーペしかないので、それで確認しようががんばったが、よくわからない。仕方なく本土に行って出身の研究室に立ち寄り、ビノキュラーを借りて見たところ、粒状物はベリジャー幼生の塊であることを確認できた。私はその光景に感動したが、同時に暗澹たる気持ちになった。顕微鏡などは分野によっては必須の装置だが、なぜ個人の手元に置いて使い続けてはならないのだろうか。公的組織の所属者であれば、助成金で購入した機材は自らの機関に委ねればよく、その後も便利に使用できる。こうした規定もまた、機関研究者と民間研究者の格差を拡大する要因となる。

この融通のきかないシステムは、別の面で問題を引き起こす。研究者は補助金の費目が決まっているためにその通りに使い切ろうとし、業者の言い値で機材等を買う傾向があるように見える。その結果、しばしば一般の消費者感覚からは、かけ離れた価格設定が行われている。私の経験した例では、大学院時代、実体顕微鏡用の計測装置を使っていたが、その値段は調べてみたところ約5万円であった。鉄の筒にプリズムと反射鏡が入った、簡単なものである。その後大学を離れてから、個人で調達しようと思い、カタログを取り寄せて価格を調べると、20万円以上になっている。10年ほどたっているからある程度の値上げは覚悟していたが、4倍は異常である。そこでカタログをよくみたところ、理由がわかった。別項に、同種の目的に使うコンピュータ制御の精密な測定装置が新たに商品化されており、その価格が25万程度なのである。また、ある時さる民間団体が所有する水質測定装置を、お願いして使用させてもらうことになったが、マニュアルが紛失していて使用法の詳細がわからない。そこで業者に連絡して送ってもらったが、届いたのは10ページほどのコピーで、請求書には3000円とあった。原価は郵送料を入れても500円にもなるまい。公費を扱う業者は、こういう価格設定をするものかと驚いた。これらは公費へのタカリというべきである。

補助金を受ける研究者の側も、本来なら値切ったり、相見積りを取って低価格で抑

える努力をするべきだが、申請前の段階で、そこまでのことはやりにくい。もしも助成金の使用に融通がきけば、個々の項目で価格を抑える努力をして、なるべく多くの用途に資金を回す事を考えるだろう。私が助成を受けたある民間のファンドの場合、2年間使用でき、また、使い切らなかった分はプールしてその後も使うことができた。3年目以降は出資者の関与はなく、ずさんといばずさんだが、私は少しでも長持ちさせようと、できるだけ節約して使っていた。そしてこのこともあって、20年余にわたる調査を続けることができたのである。

研究用の機材は一般に需要も少なく、特注などの場合は高額に設定しないと、業者も採算が合わない場合があることは理解できる。しかし実際には、そういうエクスキューズを越える事態が存在する。これは税金のムダ使いそのもので、そのために失われる金額は、全体の研究補助金のかなりの割合を占めるのではないか。

学振の助成金を中心に、私が問題と思う点について提起してきたが、いくつかについてはそうなることもやむをえないと思える面がある。たとえばもっと細かい配慮をという点については、奨励研究だけで3千件、他も合わせて膨大な件数と金額に上る補助金の総体を効率的に運用して行こうとすれば、ある程度事務的にならざるを得ないかもしれない。また、1や5は、補助金の不正使用の問題と結びついている。私を知る限り、数十年前の科研費は今よりずいぶんアバウトというか、ある意味使いやすく、ある意味ずさんであった。ある研究室では、研究室付きの事務員氏が院生から印鑑を預かっており、それを使って謝金の領収書を切っては、院生の調査旅費など、他の目的に使っていた。また別の大学に科研費の説明に来た文部省の係官は、「一般的な研究費と考えていただいてよい。」と説明したという話も聞いている。このため柔軟に使用できて良かった反面、おそらく今より不正使用は、はなはだしかっただろう。うそかまことか、また誇張もあるだろうが、「科研費で家を建てた」というような、とんでもない話まで聞いたことがある。今でも、科研費の流用事例として、謝金名目で落として院生の旅費にしていた、などがニュースになるのは、かつてと同じ感覚でやっているのだろう。民間の助成金も例外ではない。ある被助成グループの会計担当者が、他のメンバーが飲み代のつけばかり回してくるので嫌気がさしているという話を聞いたことがある。ただ、この不正使用の問題は、私的に流用するのは言語道断だが、院生の学会旅費や他の研究目的に使うということまで、マスコミが槍玉にあげて非難するのはどうかと思う。そのようなことを続けていると、さらに細目まで補助金の使用が制限され、研究全体の活性が低下するだろう。

私としては50万ほどの資金を、今よりも大まかな費目のもとに、5年ほどのスパンで使用させてもらうことが理想である。それならば大いに研究の助けになるし、大事に使って成果を上げる自信もある。しかし公募要領の規定はきびしく、ああしなさい、こうしなさい、あれはだめ、これもだめのオンパレードで、読んでいっただけで気持ち暗くなってくる。とても、さあこの補助金をもらって研究をがんばろう、という意欲を起させるといった体のものではない。流用防止その他の理由からどうしてもそうならざるをえないということであれば、それはそれでかまわない。私にとって

今の公費研究補助は、手間ばかりかかって採択の見込みがなく、仮に通っても使い勝手の悪い、要するに価値のないものでしかない。今後は、公的資金のお世話にならなくてもこれくらいのことではできた、と胸を張れるよう精進したいと思っている。